
夏の欠片

林檎飴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の欠片

【Zコード】

N8465M

【作者名】

林檎飴

【あらすじ】

小学生達が肝試しをやううとやつていてる最中に靈が.....。
そして迷つてしまい村に辿り付くその村で起くる事とは?

恐怖の始まり

【5・3教室】

僕は、石崎潤^{イシザキ ジュン}11歳で性別は男「もつ明日で夏休みになるから計画を立てようと思っている。

つて計画といつても思いつかないなあ‥。」

「よおシ！」

石崎「おーこの声は！」

「なんだなんだこの声はって、声聞いてわかるだろ～俺の名前は橋本^{モトコウ}講^{コウ}11歳の男だぜえ！」

石崎「ちょうどよかつたよ 夏休み2人でどこか行かない？」

橋本「おうー いいぜ！」

.....。

石崎「計画つて考え付かないなあ。」

橋本「そうだ！肝試しとか花火大会とかやらねえか？」

石崎「おー そうだなあ じゃ あ決定で！」

橋本「おうー！」

「ちょっとちょっと私も入れてくれないかしら？」

「私も入れてほしいな。」

石崎、橋本「お！ お二人さん。」

雨倉「私、最初に入れてといつたほうは11歳の女の子の雨倉南^{アカクラミナミ}だよお。」

小松「で、その次に入れてといつたのがまだ誕生日を迎えていない

10歳の女の子 小松^{コマツ}美夏^{ミカ}です。」

石崎「メンバー4人までもう締め切り！ もう終わりです。」

クラスのみんな「えへへへ..

石崎「場所変えようか‥。」

3人「うん‥。」

【中庭】

石崎「さてここなら静かだしいいね。」

3人「そうだねえ！」

橋本「リーダー決めようよ！」

石崎、雨倉、小松「OK！」

3人「始めた石崎君がいいと思います。」

意見はすぐ決まつてしまつた。

石崎「リーダーとしてがんばります。後、明後日の朝ここに集合ね。」

3人「OK！」

（チャイム）キーンコーンカーンコーン

4人「そろそろ帰ろうか。」

そして学校は夏休みへと入つた。

そして待ち合わせの時間。

一番に来たのは雨倉だつた。

雨倉「石崎君、待たせないでよ」 しつかりリーダー。」

石崎「ごめんごめん ちょっと寝坊して」

三番に来たのは橋本 そして小松

石崎「よし全員集まつたね。」

石崎「じゃあ、いきなりだけど朝から肝試し。」

3人「OK！」

石崎「とある駐車場を紹介するよ そこには昔5歳児の男の子が事故にあつた場所らしい。」

3人「怖くない？ 呪われたりしないよね。」

石崎「多分大丈夫だと思うが…。」

駐車場到着

【駐車場】
石崎「こんな空気じゃ出そうにないなあ。」

橋本「ああなあ」

雨倉「ほんとに幽霊なんているのかなあ？

小松「早く帰ろよー。」

石崎「小松が帰ろうつて言つから帰ろうか？」

3人「うん」

と、帰る その時だつた

「えーーん えーーーん」

ちょうど5歳児ほどの子供の声がした。

橋本「これはやばいんじゃねえか？」

と、みんなで橋本方を見ると、なんと橋本は見た事もない血だらけの5歳児の男の子を背負つていたのだ！

小松はギヤーといつて駐車場を駆け出していた。

小松に続いて雨倉も逃げ出した。

今度は僕、石崎 潤も逃げ出そうと思ったのだが、橋本が肩を掴んできたので僕は逃げなかつた。

石崎「やめてよおッ！」

橋本「いいか、離すから逃げないでくれ

石崎「わかつたから離して

パツ 手が離れた。

僕はそのまま少し離れて倒れこんでいた。

気付けば僕は駐車場に一人で倒れこんだままだつた。

夜だし、暗くて何も見えなかつた。

石崎「誰かいりますかー？」

.....。

声は無かつた。

立ち上がりつてもう一度言つてみたが声は無い。

だが その時！

ペチャ ペチャ ペチャ ペチャッ！

裸足で歩くような音がする。

ペチャ ペチャ ペチャ ペチャッ！

どんどん音は大きくなつていいくにつれて、怖くなつてきた。

と、その時！

????「危ないっ

ドカツツ

何かを棒でたたいたような音がした。

？？？「大丈夫か？」

石崎「だ…大丈夫だけど、ところで誰？」

？？？「声聞いてわからないか？」

石崎「うん。」

橋本「橋本 講だよ。」

石崎「お前！ お前こそ大丈夫か？」

橋本「大丈夫だ お前まで巻き込んでゴメンな。」

石崎「こっちこそ 助けてもらつてありがとな。」

橋本「そろそろ帰るか？」

石崎「帰ろう。」

橋本「ラジヤー！」

と、その時…！

子供の親「よくも私の子を叩いてくれたわね！」

石崎「まずい！」でさつきの子供が轢かれて母は悲しみで自殺をしたのだ…！」

橋本「どこでそんな事を知つたのか？」

石崎「とにかくいいから逃げるよ！」

子供の親「待てえッ！」

【山奥】

石崎「そうだ！さつきの棒を投げるんだ！」

橋本「やつてみるよ。」

橋本「えいツツ」

バンツ！

棒は運よく子供の親に当たつた。

子供の親「ウオオオツ」

2人「やつたな…。」

石崎「よし帰ろう。」

橋本「おう！」

2人「ここどこ〜〜。」

石崎「やばい迷った。」

橋本「まっすぐ行けばよかつたな。」

2人「あ！！」

???'ああ！！」

2人「雨倉と小松、こんなところでどうしたんだ？」

雨倉、小松「道に迷つて…。」

2人「じゃあどっちも迷つたつてこと…！」

雨倉、小松「そっちも！？」

2人「うん…。」

4人「じゃあどうすんの〜〜。」

石崎「とにかくまわりに町があるか見てみよ。」

3人「でも、ここは山奥だし」

4人「あ！ あそこに村がある。」

呪村？

【村】

雨倉「この村誰もいないね。」

橋本「あああ……。」

小松「あ！ あそこに家がある。」

4人「行つてみよう。」

【玄関】

ピーンポーン

返事がない。

橋本「こうなつたら抉じ開けるしかない。」

4人「せーの

ドン！ ！

ドアが壊れた。

【家】

家は村の中心あたりで大きな2階建だった。

そこは「ごく普通の家で僕たちでもすめるような気がしていた。」

雨倉「ここに住めるかもしない。」

橋本「そうだなあ。」

石崎「住もうか。」

3人「OK！」

小松「もうお腹ペペコだよう。」

橋本「そろそろ飯にするか」

石崎「でもここには何も無いし……。」

雨倉「村中探すわけにもいかないし……。」

石崎「今日はひとまずここで寝ることにしよう。」

小松「でもお腹ペペコ。」

雨倉「わがまま言わないで石崎君の言つこと聞いつ。」

小松「うん。」

2階【ベットルーム】

そしてみんなはベットルームへみんなで集まつて寝たのでチヨシト暑苦しい気もした。

僕はこつそりベットルームを抜け出した。

1階【キッチン】

キッチンは生臭い臭いが広がつていて料理道具はほとんど錆びて使えなかつた。

その時!!

風が強く吹き何かが窓に向かつて飛んできたのだ!!

窓が強く割れて大きな音がしたが、3人は気付かず起きてこなかつた。

それは工事の看板だつた。

「お願い『迷惑をおかけして居ります。』工事中』協力をお願ひ致します」

と書いていて、黄色いヘルメットをかぶつたおじさんのところにかすかに血が付いていた。

石崎「さて、そろそろ『』を出よ。」

【村】

村は風が強く木の枝などが辺りに散つていた。

石崎「帰り道を絶対見つけてやる。」

そして、歩いていると着物を着た女の子に会つた。

石崎「おおー こんなところに人がいたのかーー!」

女の子「こんば……んわ。」

石崎「こんばんわ。この村から出る方法はありませんか?」

女の子「無いと思つよ。」

石崎「え? じゃあ何でここに来れたの?」

女の子「その時はまだ道があつたから…。」

石崎「じゃあ もう道は無いってこと?」

女の子「そうこうことよ。」

女の子「私、用事があるから帰るね。」
女の子は煙のようく消えていった。

石崎「あの子幽霊か？」

石崎「あ！ 空が…。」

空はもう日が出ていて朝になつたばかりだった。

石崎「3人が起きてるかもしない！」

僕は急いで家へと帰つた。

家へ付いた。

【家】

僕は急いで2階へ上がつた。

【ベットルーム】

まだ3人たちは寝ていたので、寝たふりをする事にした。
そして、雨倉が起きてベットルームから出て行つた。
その次に小松が、そして僕もベットルームから出た。

【キッチン】

石崎「お2人さん、起きるの早いね。」

雨倉「お！ リードアーサン。」

小松「昨日の夜から何も食べてない…。」

石崎「そうだなあ。」

雨倉「つて言つても何もないよ。」

小松「じゃあこのまま死んじゃうつてこと？」

石崎「そうかもな。」

雨倉「橋本君起こしてくるね。」

石崎「いやいい、僕が行くよ。」

雨倉「わかったよ。」

【ベットルーム】

石崎「橋本… 起きて…。」

橋本「う… 痛て…。」

石崎「どうした？」

橋本「う… 夢か。 でも膝が痛い。」

石崎「ん？ こけた夢でも見たのか？」

橋本「うん。 そうだ。」

石崎「さあ 外にでも出よ。」

橋本「ああ。」

と、立ち上がったとき橋本の膝にはかすかにこけた跡があった。

石崎「その怪我は…。」

橋本「夢でこけた時の怪我と同じだ！」

石崎「これは悪夢か？」

橋本「そうかもな…。」

橋本「早く 外出ようぜえ。」

石崎「怪我はいいのか？」

橋本「ただのすり傷だ！ 大丈夫だ！」

石崎「じゃあ行こうか？」

橋本「ああ」

【キッチン】

雨倉「これから別々に行動するわよ。」

小松「怖いよ…。」

雨倉「もう、しょうがないわねー。2人で1チームにするわ。」

雨倉「じゃあ私は美夏ちゃんど。」

橋本「じゃあ俺は石崎ど。」

石崎「みなさん、夜が明ける前にはちゃんと帰つてくださいね。」

2人「はーい。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8465m/>

夏の欠片

2010年10月9日04時44分発行